

とこしえの光

一九二二年五月七日、ゲッティンゲン

太陽は再びあなたの昼を照らす光とならず
月の輝きがあなたを照らすこともない。
主があなたのとこしえの光となり
あなたの神があなたの輝きとなられる。
あなたの太陽は再び沈むことなく
あなたの月は欠けることがない。
主があなたの永遠の光となり
あなたの嘆きの日々は終わる。

(イザヤ書六〇・一九―二〇)

「主があなたのとこしえの光となり……」。聖書全体の内容がそうであるように、これは告知であり、約束である。それ以上でもないが、しかしそれ以下でもない。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている」〔黙示録三・二〇〕。一つの大きい強い手が、われわれの方に伸ばされている。それは、われわれから、何を求めようとしてい

るのであろうか。この手につかまれたら、われわれは、どうなるのであろうか。しかし、それは、どうでもよいことである。われわれが知らねばならぬことは、ただ、われわれがその手の中にいるということだけである。そのことを知る者は、聖書を理解し、聖書の中心を理解し、イエス・キリストを理解する。しかし、人は、そのようなことを知らずにいることもできる。イエス・キリストは、誰にも御自身を押しつけ給わない。われわれはみな、自分がそのようなことは忘れていたという事実、くり返し直面する。われわれは、彼に向かって、「主イエスよ、来たって、われらが客となり給え」と言うであろうが、しかし彼は、決して誰の同居人にもなり給わない。〔主があなたのとこしえの光となり〕というあの告知は、われわれに向けられた問いであり、また問いであり続ける。なぜかと言えば、イエス・キリストは、神の活ける御言葉でありまたあり続け給うからであり、彼の思いはわれわれの思いではなく、彼の道はわれわれの道ではないからである。われわれは、聞くことも可能であるが、しかし聞かないでいることも可能である。イエス・キリストは、聞く耳を持つ者に語り給うのである。

「主があなたのとこしえの光となり……」。この御言葉を、われわれは、どのように理解すべきであらうか。われわれのテキストからは、(少なくともわれわれの耳には)二様の真理が語られている。第一に語られているのは、次のような真理である。すなわち、すべての光は(それが最大の光、もっとも美しい光であっても——太陽や月であっても)、その光と輝きを失わねばならない。別の無比な光が、それに取って代わろうとしている。「わたしは主」と語られ、「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」と語られているように(出エジプト記二〇・二以下、申命記五・六以下)。——しかし、そこにはさらに、次のような真理も語られている。すなわち、このただひとつの光の太陽は沈むことがなく、このただひとつの光の月はその光を失うことがない。「あなたの嘆きの日々は終わる」というのである。すなわち、われわれから一切のものを奪おうとする一人の巨大な敵ま

た盗賊が、同時にわれわれに一切のものを与えようとする一人の偉大な友また助け手だ、というのである。われわれは、もしそのような矛盾する事柄を、ただひとつの言葉で語ることができ、あるいは聞くことができるなら、どんなに素晴らしいことかと、思うであろう。なぜかと言えば、すべての光が消えることとただひとつの真の光のぼること、神が奪うことと与えること、審くことと赦すこと、地獄に落とすことと天に導くこと、殺すことと生かすこと、律法と福音というように、ここに告げられているのは、実はただひとつの言葉だからである。もしあなたが、その一方だけを聞いて他方を聞かなければ、あなたは神の御言葉を聞いたのではなくて、人間の言葉を聞いたに過ぎない。もし、あなたが一つの言葉の中に二つのことを聞き、二つの言葉の中に一つのことを聞くなから、それは、「生きており、力を発揮し、どんな両刀の剣よりも鋭い」(ヘブライ四・一二)神の御言葉である。しかし、まだどんな人間の口も、そのような言葉を言葉として語ったことがなく、どんな人間の耳も聞いたことがない。われわれがそれを語りまた聞く場合には、それは、われわれの唇では、またわれわれの耳では、分裂して、謎となり、問いとなるのである。

なぜそういうことにならざるをえないのか、あなたには分かっているであろうか。それは、それがいつもわれわれにとつて神の御言葉であるためであり、啓示され信じられねばならぬ神御自身の御言葉であるためである。神の怒りと神の憐れみ、神の支配と神の助け、神の尊厳と神の愛、神の律法と神の福音——そのような矛盾したことしか人間の口が語りえないということ、人間の耳が聞きえないということが、必要なのである。外に表われた神の御言葉におけるこのような謎が、われわれをくり返し驚かし、われわれに自分の罪を認めさせ、神のいくしきみと敵しさが朝ごとに新しいことをわれわれに示し、われわれを悔改めに導き、われわれを励まし、そのような仕方であれわれを、心を開いて真に神御自身に語らせ神御自身に聞く者とするのが、必要なのである。も

しかりにわれわれが、矛盾と謎を持った外に表われた御言葉のかたわらを通り過ぎて、直接に神の語り給うあのただひとつのことを自分の口で語ることができ、それを自分の耳で聞くことができるとすれば、われわれはおそらく、あまりに傲慢になることであろう。その場合には、われわれは、またしても神のようになろうとすることであろう。そして、そのときにこそ、神はわれわれに語り得給わないであろう。神がわれわれに語り給うのは、ただ神御自身がわれわれに対して語り得給うときだけであり、神が御自身をわれわれに啓示しようとするときだけであり、われわれが神を信ぜざるをえないときだけである。そのために、神は、外に表われた御言葉を必要とし、御言葉の不明確さと矛盾を必要とし給うのである。

見よ、われわれすべての者は、神が(神御自身が)われわれと語り給うということによって生きている。そして、神がわれわれに対して、われわれが彼のものであると語り、われわれに向かって伸ばされた手は彼の御手であると語り給うことによって、生きている。そのような神の御言葉を、一方の側からより多く聞くか、それとも他方の側からより多く聞くか、ということは、根本的には重要なことではない。すなわち、ただひとつのとこしえの光がわれわれを照らすために、われわれを照らしているすべての光が消えなければならぬという第一のこの方をより多く聞くか、それとも、このただひとつの光がわれわれの他のすべての光の代わりとなりわれわれの嘆きの日々は終わるという今一つのこの方をより多く聞くか。われわれが自分を神の恵みによって審かれた者として自覚するか、それとも、神の審きによって赦された者として自覚するか。われわれにとって、助ける方が主となるか、それとも、主が助ける方となるか。われわれの心と良心が、神の愛によって傷つけられるか、それとも、神の敵しさによって癒されるか。それは、根本的には重要なことではない。もしわれわれが「わたしはある」(出エジプト記三・一四)という神の告知を聞き、「わたしはあなたたちの神となり、あなたたちはわたし

の民となる」〔レビ記二六・一二〕という約束を聞くならば、それは、根本的には重要なことではない。なぜかと言え、この約束の中には、その完全な真理の中にある神御自身がいますからであり、それゆえにすべての慰めと最高の希望と完全な勝利が、慰めなく希望なく敗北した者たちであるわれわれのためにも存在するからである。われわれは、神がその変わることにない信実を、われわれに對して保証し給うことによって生きる。われわれは、イエス・キリストが聖書の中心からわれわれの心の中心に向かつて、語り給うことによって——すなわち「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」〔ヨハネ一五・一六〕という事実によって生きる。厳しくであろうと慈しみに充ちてであろうと、われわれを驚かすようにであろうとわれわれを魅惑するようであろうと、われわれがそれを審きとして感じようと思ひとして感じよう、彼がそれをどこで語られようと、彼がそれを語り給うところでは、また語り給うときには、われわれは罪人であり死につく者であるにもかかわらず、自由がある。神の子らとして生きる自由があり、またもや一日を——次の一日を生きる自由がある。（それ以上にわれわれは何を望もうか）、生き耐え持ちこたえ働き絶望せず自分の生を犠牲にする自由がある。そこでは、巨大で果てしもない永遠の蔭が、われわれを謙虚ならしめつつ、われわれの上に落ちてゐる。それゆえにこそ、そこでは、われわれは、無限に近づいて来た天国に對しての、また新しい天と新しい地に對しての、われわれの精神を高揚させるような大きな展望を、持つのである。

そのようにして、われわれは、外に表われたままの姿で（曖昧な矛盾に充ちた言葉として）われわれのもとに来る、神の御言葉によって、生きる。絶えず新しく神御自身によって啓示され絶えず新しくわれわれによって信じられるよりほかはない、神の御言葉によって、生きる。まだ神の御言葉によって生きていない人がいるとしても、その人は、神の御言葉に生きることを待っているのである。そして、その両者の間の違いは、おそらく人々を考えるほど大きいものではないであろう。まったく不可能なのは、神の御言葉によって生きるのを待っていないということである。なぜかと言え、われわれは、罪人また死につく者としてこそ、死への生からのちへと導き給う神と、確固として結ばれているからである。それは、ある人が「ナザレのイエスの中に自分の支配者を見出すという資質を与えられていないような心や良心は、存在しない」と言った通りである。

「主があなたの永遠の光となり……」。われわれが恐るべき深みの中にいて、この約束を非常な遠方からしか聞いていないということ——それはたしかである。一体、どうして、そういうことになるのであろうか。われわれが、神の太いなる「それにもかかわらず」によって覚醒させられることもなしに、このように長い歳月にわたって、慰めもなく希望もなく敗北した者でありつづけるということが、どうして可能なのであろうか。われわれが、決して無神論者ではなく、いわゆる「敬虔なクリスチャン」であるのに、われわれの生活の大部分が、あの救いの力を持った永遠の蔭の中にはなく、むしろ陰鬱な神なき状態の蔭の中に立っているなどということが、どうして可能なのであろうか。その中ではわれわれのすべての日々が少なくとも多少輝くにちがいない、イエス・キリストの永遠の日の照り返し——それは、どこにあるのであろうか。

私は、そのような事態を引き起こす第一のもの——比較的軽い事柄について語ろう。われわれはみな、あまりにもしばしば、またあまりにもたやすく、神がわれわれと語ることが不可能な状態に巻き込まれるのである。自分ではそれと知らずに、われわれが神に背中を向けているために、神がその御言葉をわれわれに啓示することもわれわれがそれを信じることも不可能な状態に、われわれは巻き込まれるのである。たとえば、われわれは、何かちょっとした敵しさや怠慢や不正直や功名心等で自分の良心を汚すことによって、そのような状態に巻き込まれる。そのようなことは、キリスト教とならば、おそらく見事に調和できるのであろう。われわれがそのような状

態であるよりほかはないということを、われわれは、おそらくすばらしく宗教的に根拠づけることもできるであろう。しかし、それが神の御言葉と調和することとは、ありえない。その場合には、御言葉は、われわれにはもはや何も聞こえずわれわれがただひとりで放置されるということによって、直ちに報いるであろう。また、われわれが、自分がどれほど善良な人間であるか、賢い人間であるか、敬虔な人間であるかということを、無益な仕方で見せびらかし、傲慢な態度で、自分が神から何かを与えられているということを示して見せるということとも、あるかもしれない。たとえば、キリスト者のグループでよく言われるように、人々が証しをせねばならないと考える場合などに、どれほど容易にそのような状態に陥ることであろうか。しかし、それは、実に良くないまた危険な状態なのである。自分が証しすべき人間だと本当に考える場合でも、あなたが証ししなければならぬのは、決してあなた自身についてではなくて、神についてなのである。あなたがそのような者でなくて、自身自身の預言者である場合には、あなたと神との間の開かれた扉が、あなたがそれに気づくずっと以前に閉じていても、それを怪しんではならない。われわれが他の人に対して自分が正しいと考え、その際に、正しくあるという権利を持ち給うのは神だけだということを忘れてしまい、したがってわれわれはするように言ったり振舞ったりすべきではないということを忘れてしまう——そのようなことは、起こりうることである。単に起こりうるというだけでなく、それは、日毎に起こる。われわれが、自分の正しさの中にあって正しくない者だということを、自分で知っていると——そのことを、人々がわれわれの一種の優しさによって気づくようであれば、ばならない。そのような者たちとだけ、神は語り給う。われわれがもしそのことを理解しようとしなければ、われわれは、たちまち暗い部屋の中にいるように、進退に窮してしまふであろう。

私は、その影響がもっと広範囲でもっと重要な今一つの事柄について述べよう。キリスト者たちは全体として、

われわれ人間が神御自身のとこしえの光によってしか生きえないものだということを、一般に忘れている。彼らは、われわれがこの光に仕えることしかできないのであって、その所有者あるいは管理者たりえないのだということ、を、忘れている。彼らは、その世界観や人生観や教会的伝統をたずさえ、さらに時代の経過の中でこの世の諸権力と結んだそのさまざまな盟約をたずさえ、この光の前に立って、「見よ、これがとこしえの光だ」と言う。そして、世の闇がこのように巨大であり人々が神の御言葉に対してこのように背を向けているという事実に驚き、それを憤るのである。しかし、人々がわれわれに対して背を向けわれわれの主張に対して背を向けているからといって、彼らが神に対して背を向けているというのは、たしかなことであろうか。われわれが手輕に決めて福音と呼ぶものがイエス・キリストの福音だということは、たしかであろうか。いわゆるキリスト教的世界観の勝利が神の勝利であるということは、たしかであろうか。栄えている教会が神の国の前進と到来との証しであるということとは、たしかであろうか。それらすべてのことを、われわれは、どこから知るのであるか。私は、次のように思う。すなわち、自分のキリスト教的心情に対しても懐くそのような問い、そのような疑いが、われわれの心の中で燃えるとき——したがってわれわれの確信がただひたすら神に対してだけ投げかけられるとき、そのときにおそらく初めて、われわれは、とこしえの光に真に仕えることができるのであろう。もしわれわれが、自分自身の確信に（たとえそれがキリスト教的確信であっても）しがみついているとすれば、われわれは、とこしえの光を覆いかくし、われわれが神なき人々と呼ぶ人々よりも以上に神なき者たちであらう。神の力は、いつもただ弱い者たちにおいてのみ、力あるものであったのである。

私が述べようと思う第三のことは、もっとも普遍的でもっとも重要な事柄である。われわれがこのように深みに落ち込んでおり、自分に与えられた約束の力の中に真に生きることからこのように遠ざかっているその理由は、

生きる力を与えるその御言葉をわれわれに対して語ろうとされる神が活ける神であり、一つの道をわれわれと共に歩み給う神であり給うという事実を、われわれがこのようにしばしば、またくり返しこのように頑強に、認めようとしなからである（神がわれわれと共に歩み給う道——それは、もちろん奇異なほどに険しい道であり、目まいがするような道であるが、それゆえにこそ、それは、われわれを前方へとまた上方へと導く道なのである。それに対して、われわれが極めて自然に目まいを催すこともなく前進してゆくわれわれの道と思われるものは、それゆえにこそ道ではないか、あるいは、われわれを平面上で堂々めぐりさせる道なのである）。われわれは、ここで今一度、われわれの聖書箇所におけるあの対照に、立ち返る。「太陽は再びあなたの昼を照らす光とならず／月の輝きがあなたを照らすこともない／主があなたのとこしえの光となり／あなたの神があなたの輝きとなられる」。そして、そこではさらに、われわれはそのようなとこしえの光において、太陽と月を持つことになり、その光はもはや消えることがなく、われわれの嘆きの日々は終わると、言われているのである。したがって、まず第一には、さまざまの光が輝くということがあって、それからそれらの光が消えるということが起こり、さらにその上でただひとつのとこしえの光が輝くのである。すなわち、死への生からいのちへ、である。それが、われわれがくり返しこのように無理解なままでそれに対して立っている、神の道の険しさであり、目まいを催させるものである。——やがて消えるべきさまざまな輝く光というのは、神御自身が創造の第四日に点火し給うた光であり、すべての創造の光についてと同様に「神はこれを見て、良しとされた」（創世記一・一〇等）と言われている光である。したがって、われわれは、軽やかな足どりで創造から救いへと、移ってゆくのではない。われわれの聖書箇所によれば、神によって創られた光に対して、神御自身が、その光を——とこしえの光を、第二のもの・新しいもの（それに対しては創られた光は過ぎ去らねばならぬ古いものであるが）として、対置し給うの

である。神は、御自身の被造物に対しても——御自身の創造とその秩序に対しても、いつまでも自由であり、優越して給う。それが、神の生命力である。そして、そのような神の生命力こそが、その御言葉においてわれわれに対して語りかけるものである。神がそのように前代未聞の仕方であり給うという事実が驚くということとは、おそらく当然であろう。しかし、神がそのような神であるという事実がわれわれが目を閉ざすということとは、よろしくない。神の御言葉は、われわれを内面的に、われわれの罪から解放するだけでなく、またわれわれ自身から解放するだけでなく、神が創り給うたもの（良く創り給うたもの）からも解放するのであるが、この事実に反対するということは、よろしくない。神の御言葉は、われわれを、神御自身に——創造者に、結びつけようとする。そして、それゆえにこそ、御言葉は、われわれを神の被造物に結びつけているきずなを緩めなければならぬのである。私は、それを断ち切らなければならない、とは言わない。しかし、それを緩めなければならぬ庭のために生きているのではなく、自分の子供たちのために生きているのではないということ——そして自分の家にあるのではなく、自分の国民のために生きているのではなく、さらに教会のために生きているのではないということ、知らねばならない。それらさまざまな光を自分自身から消し去る権利は、誰にもない。しかし、それらの光を神のとこしえの光と取り違える権利も、誰にもないのである。自然の諸秩序を破壊する権利は誰にもないが、神の意志をそれが自然の諸秩序の中に記されているかのようにそこから読み取ろうとする権利も、誰にもない。何が彼の意志であるかということは、創造者である神御自身が語ろうとし給うのであって、どんな被造物もその際その代わりを務めることはできない。われわれが死ななければならないということが確実であるのと同様に、われわれは、それらの造られた光のすべてが消えるを見る心ぞなえをしていなければならない。そう

ではないであろうか。ところが、そのような心ぞなえに対して、われわれは、反抗するのである。創造者がその被造物の上に立ち給うということが、われわれには、異様なことと思われるのである。われわれは、神御自身がわれわれに語り給うであろうことを、恐れるのである。「われ汝にそむきて、造られし光を愛したりき」。その場合には、われわれは、神の意志によって生きるという約束を、真に聞くことはできない。また、神が、活ける神として——御自身の栄光を他の者に委ね給わぬたひとり、神として、われわれと語るといふことは、不可能であり、それゆえに、われわれの周囲は、このように暗いのである。——これが、われわれの道をさえぎっているもっとも重大なものである。しかも、それは、われわれすべての者の道をさえぎっているのである。

しかし、それがわれわれの道をさえぎるという必然性はない。神御自身がわれわれの近くにいまさないというような、そしてわれわれが神の御言葉を直ちに聞くことができないというような、そのような深い所・遠い所は、存在しない。イエス・キリストは、罪と世界の上に立っていられる。彼は、罪の赦しであり、世に勝つ勝利であり給う。誰が、キリストの愛から、われわれを引き離そうとするであろうか〔ローマ八・三五〕。

われわれの聖書箇所のお言葉は、かつてイスラエルの民に向かって——おそらくはバビロンにいる追放された人々に向かって語られた言葉である。いづれにしても、イスラエルの民の困窮が甚だしいものであったところに語られた言葉である。今日それを読み直すとき、われわれは、それがまったく慰めの言葉によってだけ包まれているのを見るであろう。われわれもまた、慰めを求めている。しかし、「われらを慰め給え。さらば、われら慰められん」というように真実で堅固で永遠の慰めを求めることは、実にまれである。穴だらけの水ためを棄てて再び生きた水の源を見出そうとするあこがれがなく、そのような意志がなければ、どうして、われわれが、そのような言葉を、語ることができるであろうか。

主の御名

一九二二年一月一日、ゲッティンゲン

主の御名は力の塔。正しい人はそこに逃れて、高く上げられる^{〔1〕}。

(箴言一八・一〇)

「御名を崇めさせ給え」という、あの主の祈りの第一祈願を、これまでわれわれが本当の理解と真剣さで祈って来たかどうか、私は知らない。第二祈願と第三祈願で語られている神の「御国」、神の「御こころ」が何かということについては、われわれは何か分かっていいる、思っている。そこでは、われわれは、多少関わりがあると感じる。そして、第四祈願以下については、なおさらである。しかし、神の御名とは、何であろうか。そこでは、われわれは、何も関与しない。むしろ、われわれは、何かその外部にいる。正直に言えば、この言葉は、われわれには、極めて奇異で外面的な響きを持っていないであろうか。われわれは、これまで、ここでは一体何が命のあるもの・重要なものなのかと、ひそかに自問したことはなかったであろうか。そして、途方に暮れたことはなかったであろうか。われわれは、ルターの信仰問答やハイデルベルク信仰問答でそれについて語られた優れ